

アナザータイム2008

ウェットル

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

仮面ライダージオウに登場する怪人『アナザーライダー』が中心の神様転生。

あくまで変身者は全員、“偽物”の仮面ライダーとして登場する【ハイスクールDXDの世界】の異常事態。その偽物のひとり、月隠^{つきもり}朔郎^{さくろう}はアナザーフォーゼへと変身し、“友達^{トモ}”兵藤一誠のために立ち上がる！

転生させた“神様”の計画に乗り、救え、自分たちの未来を！

目次

「旧校舎のディアボロス」

怪・人・変・身	1
変・態・上・等	10
女・帝・逢・引	21
美・男・暗・躍（?）	31
令・嬢・表・裏	40
読者の皆様への投稿終了のお知らせ、および設定集	53

「旧校舎のディアボロス」 怪・人・変・身

わあきやあ、と、校舎の何処から黄色いような、それでいて怒りの感情を感じられる女の子たちの悲鳴が響き渡る。

冷静に考えれば、そんな事態が毎日起こっているか、毎週に数回も起こっていることのほうがおかしいのだけれども。それが、ボクの通う学園の日常になっていた。

黒板を走る白いチョークが止まり、教壇に立つ先生は疲れたようなため息を吐く。

「まったく去年といい、今年といい。」

彼等はいっぴになつたら、自分の内申点を気にしてでもいいですけど、止まってくれるのでしょうかねえ。覗きとか、セクハラとか……」

先生の頬を、ちよつと白い光が走つたような気がする。

これで女の先生だったり、いかにも尊敬に足る男らしい先生だったり、適当なチカラを持った善良なる学生がしゃしゃり出て問題児を止めに行くのだろうか。

もつとも、目の前にいるのは退職間近の高齢の老紳士で、お嬢様学校だった共学になる前のこの学校を支えてきた、背広にシワが見えるおじいさんだからなのか、そんなマトモそうなやつは誰一人も出てこなかった。

高齢の老紳士として教鞭を執り続けた、お嬢様学校の大先生、というだけでも尊敬に足ると思うんだけど、わりと普段から問題児たちを口酸っぱく貶したり、ぶん殴りに行くだけの生徒はむしろ大先生のためには頑張りもしないらしい。

「……先生、ボク、止めに行きましようか？」

仮にもボクは、その問題児たちとの付き合いはある生徒、という立場。
場。

その立場であれば、さすがの問題児たちも耳を貸して、多少は立ち

止まってくれるかもしれない。というか、ちよつとでも立ち止まってくれるから、現状はまだ後がある方だ。

同じクラスの友達というわけじゃないが、あの三馬鹿の破廉恥なやらかしは犯罪だろうとなんだだろうと、性行為に至るべく暴力に走らない、強姦に走らないほどの“ヘタレ”なだけ、かろうじてマシな部類だ。

そこだけはまだ友達として、被害者に許しを請えるものがあるとかボクは信じている。

むしろ、アイツらは“ヘタレ”だからこそ、ちよくちよく未遂で終わったり、見張りをしていた女の子に見つかったり、わざと用意された“覗きスポット”——「そんなのが現実にあることのほうがおかしい」と気づかない側が馬鹿を見るだけなのだろうけど——に、ひっかかる程度で済んでいる。

かつてはお嬢様学校であったがために起こり得なかった事態に対して、先生たちの対応も日に日に進歩し始め、ようやく共学の高校らしい対策が練られ始めたのか、廊下を走る先生たちの重い足音が机を振動させてきた。

それだけの先生方を動員するほどだ。

いつそ、学園から追い出したいというのが先生たちの本音なのだろうけれども。

「気持ちには分かりますが、まだ授業中ですから。

友達の事よりも、まずは自分のことをしつかりと。よろしいですか？」

だとしても、今までは現行犯で逮捕……とは、いかなかったように。

どこかから先生たちの怒号が聞こえはじめて、ようやく三馬鹿の悲鳴が響き渡る。

あんまりにも長く逃げすぎて、かえって先生方にも追いかける状況にまで悪化しきってしまったようだ。ついに大事として処断されるべきときが来てしまったらしい。

もうちよつと走り込みとか頑張ってさえいなければ、早めに女子生

徒たちに捕まって、ことが大事だと白黒つけられる前になあなあで見逃されたり、養護されたりでもしたのだろうか。なぜか少しだけ、外の女子生徒たちの声に迷いが見え始めた。

原作では、きつと彼女たちの優しさに助けられていたのだろう。

ボクはそう結論付けると、先生の言葉にうなずいて席に着き直した。

こうして、何事もなかったかのように、むしろ何事もなかったことにしたいかのように、平常通りの授業が続けられる。

ボクの名前は、つごもりさくろう月隠朔郎。

今時珍しい“郎”の字がある名前を授かり、この世界に転生した日本人。

友達は、我らが「ハイスクールD×D」の主人公、兵藤一誠と他二名の三馬鹿トリオ。

……以上。特典とか、特殊な生まれなんてものはない。

純粹に一般人で、普通に入学試験に実力で通って、問題ない素行で青春をやり過ごしているような人間。それがボクだ、今のところは。

放課後、どこかで聞いたようなやり取りを思い出しながら、夕方の犬の散歩をする……つもりだったところを、家族からの頼まれごとで商店街まで自転車で走って行って、そのまま大量の荷物を持って帰ることになってしまった。

なんだか状況がややこしいけれど、これがボクの家での日常。

どういうわけか、家事のいろいろを頼まれるというか、頼まれやすいのかなんなのか。

とにかく、おばあちゃんとお母さんからの買い物をお願いを、犬の散歩をする前にやることになってしまったのだ。

頼まれた内容がとにかく多い、というより、おばあちゃんからの頼まれごとと合わさって、帰りの荷物が凄いことになっている件について、お母さんが気づいてないから加減も何もない状態になっていた。

念のために、リュックサックも持ってきておいてよかったよホン

ト。

おばあちゃんも流石に気がついて「後回しにしてもいい」と言ってくれたのだけれども、さすがに振込とかそういうのは忘れてしまうと大変なので、後回しにするわけにもいかず。

そうやって気がついたら、やるのがいっぱいになっていたのである。

生きるのって、大変だね。

「ん、あれって……一誠、だよな？」

自分の住んでいるところは、商店街から離れた住宅地で、非常に高齢化が進んでいて滅多なことではヒトが出歩かない。つまり、とても静かな町というわけだ。

そこにある、寂れた公園。要素ひとつひとつを見れば、どこかで読んだことのあるような公園の状況と似通っていることは誰にでも分かる。

そんな町の公園に、兵藤一誠が入ろうとしている、ということとは。

「あの子が、〃夕麻ちゃん〃なのかな？」

隣りにいる黒髪の女の子が、兵藤一誠に告白してきたという女の子……で、なければおかしいはずだ。あれが墮天使のボディコン痴女（実年齢不明）なのだろう。

できれば嘘じゃなくて、本心であってほしいんだけど。

原作通りとかじゃなくて、もしものガチ恋愛の可能性に賭けたいんだけど。

『そうはならないのが、「ハイスクールD×Dの世界」というものだろう？』

ぴたり、と、風に舞う木の葉が〃停まる〃。

音が聞こえなくなり、目の前の景色も光輝き続けることを忘れ、絵の具のような色合いへと変わった。光が停まって目に届かなくなつた……と言ふより、光そのものが絵の具のように、まったく別の光を吸収、反射するものになったのだ。

こんなわけのわからない現象を起こせるやつは、たった一人しか知らない。

「来ましたね、神様」

『ようやく決心がついたのか？』

振り向くと、白装束に身をまとった仮面のヒトがいた。

そのヒトは懐中時計のようなものをお手玉のように弄び、ある懐中時計のようなもののひとつが右手に落ちたところで遊ぶのをやめる。

『幾十人ものサンプルを転生させ、特典を与えず、このような“チャンス”だけを与え続け……ようやくだ、ようやく、私が選んだ人間のうちの一人が決断した』

左手に持った懐中時計もどき、「アナザーウォッチ」。

そのすべてを紫色の煙とともに消し、右手のたったひとつだけをボクに向ける。

『この国の、この町の、この舞台で。』

誰も知りえないどこかではない、誰もが知っているからこそその危険地帯で。

ある未来を「知ったことではない」と目をそらすこともなく、「恐ろしいから」と逃れることもなく、「今、自分が変えたいから」と神である私に要求することもなく。

かつ、「自分の正義のため」に立ち上がるわけでもない、だからこそ………』

右手のアナザーウォッチは、どこまでも黒く、禍々しい。

そのチカラは、目の前の公園で起ころうとしている事件を解決するに足るだけの十分すぎるパワーを隠し持っている。

正義の味方、「仮面ライダー」のチカラ。

………それを“歴史ごと”奪い尽くして生み出される、悪夢の変身アイテム。

ありもしないフィクションのヒーローを、本当にありもしない存在に変えるチカラだ。

『ようやくだ。今日という日にこそ。』

本当の意味で、私の計画は始まりを告げる………！』

「……………よくわかりませんが、助けられるんですよね?」
喋ってることは胡散臭いが、やってることに嘘はない。

そう信じさせられるほどの行動力が、目の前の“神様”にはある。
あの“神様”には、ひとつの恩がある。

ボクを転生させ、あるチカラを与えるに足るかを試すまで、転生先を選ぶ権利はもちろん特典なんてものも与えないとまで言い切り、本当に今の今まで普通に生きられる身体にさせてくれたんだ。

そのくらいの無茶苦茶な真似をやったのけるほどの、“神様”の計画。

テレビの中の絵空事のヒーローが本当に実在していても、その存在そのものを歴史からなかったことにしてしまう、どこまでも理不尽なチカラ。

そんなものを計画に使うというのだ。

絶対に、ろくなものであるはずもない。

『もちろんだとも。このチカラを使えば、確実にだ。』

すべての運命は、正しい筋書きから始まるべきだったのだ。

未来から過去を変えるのではなく、過去から未来を意図的に変えるわけでもなく、すべての筋書きは語られるべき物語が始まった瞬間から改竄する……………いや、“邂逅”するべきだったのだ。あるいはずのないものとの遭遇とは、そうされるべきもの』

『でなければ、兵藤一誠の物語たる「ハイスクールD×Dの世界」とは。

“胸を張っては言えない。”———そうだろう、我が契約者?』

それでも、ボクは。

この“神様”の計画通りも同然の動機で、戦うしかない。

これじゃあまるで、アナザーウオッチのチカラを使わせる理由そのものを持たせるために、あえて何も持たせなかったんじゃないかと疑りたくもなる。

「……………本当に、なにが目的なんですか、あなたは」

『ただのご都合主義じゃダメかね?』

「だったら、その胡散臭い台詞。いらなくないですか?」

『……………なるほど。キミ以外に準備させるときは、もつとそれら

しくしよう』

アナザーウオッチを投げ渡され、受け取る。

コイツは本来、契約させられる側が契約する側から埋め込まれて、初めて効果を発揮することが多いはずの代物なんだけれども。

どうやら自分の意志で、自分で変身しろ……と、いうことらしい。

“神様”は、ニタアと笑うと、

『準備はできているね？ 彼の死まで後三秒、そして！』

今日からキミが、——【仮面ライダーフォーゼ】だ！』

もう、本来の歴史からは逃げられないことを、ボクに告げた。

このようにして、月隠朔郎の日常は終わり。

こうして兵藤一誠の物語は、始まりを告げる。

THREE

TWO

ONE

【Rロcketケツ】
【Nト】

夕麻ちゃんの右手から伸びる光の槍が襲いかかった、その時！

「ライダーロケット、パンチ」

ゴスツ、と自動販売機にサッカーボールがぶつかったみたいなのが鳴り響いた。

そこから一瞬で夕麻の黒髪が目の前から消えて、公園のジャングルジムの方から物凄く痛そうな音が続けて聞こえてきた!?

「な、なんだあ!？」

ジャングルジムの方に振り返ると、そこには。

「^{ウチユウ}宇宙ウ………来たアアアッ!!」

………なんか、白くてズングリムツクリした、ゴリラみたいなのが立っていた。

少し見えづらいけれど、そのゴリラの背中の方側にジャングルジムに絡まった………絡まった? うん、絡まつてる夕麻ちゃん、カラスみたいな黒い羽をどす黒い液体に染めて、女の子がしちゃいけないようなエグい顔で痛がっている。

女の子になにやってるんだオマエ! って、言おうと思ったんだけど、

「な、なによアンタ、なんの幻想生物なのよ!？」

その当の夕麻ちゃんが、何もなかったみたいなの仕草で普通に立ち上がってきたら、目の前のゴリラ野郎へのムカツキより、夕麻ちゃんの化物つぷりの方に息を呑んじまったよ。

いや、おかしいだろ夕麻ちゃん。

キミ、さつきジャングルジムに絡まつてたよな、なんで普通に起き上がれるんだよ?

金属に絡まつてたんだぜ? 普通はそんなの、出たくつても出られないんじゃないのか!? だって、両腕とかが鉄の縄で縛られたみたいなのもなんだぞ!

………あつ、縄で縛つてたつて考えると、ちよつと鼻血出ちまった。

「ボク? ボクは、」

このゴリラ野郎の一人称、ボクかよ!?

とかなんとか思つてると、ゴリラ野郎が両手でどがつた頭を両手でこする。

キュツ、と車のガラスを拭いたような音を鳴らすと、

「仮面ライダー、フォーゼ」

そう名乗った。仮面ライダーフォーゼ？

とにかく、ゴリラ野郎は仮面ライダーフォーゼとかいう生き物らしい。

仮面ライダーフォーゼ……長いからフォーゼでいいか、仮面もライダーも名前って言うより、なんか魔法少女の魔法と少女みたいな、そういう響きがするし。

そして、フォーゼの野郎は、ドラミングしたみたいな音を二回鳴らしてから、右の拳を夕麻ちゃんに突きつける。

「タイムン。はらせてもらう、ぜ……！」

そいつの後ろ姿は。

肋骨とか背骨とか、そういうのを思わせるものが浮き出ている。

やってることは、すっげえヒーローっぽく見えなくはないのに。

助けてもらったはずなのに、なんだか、ものすごく怖く見えちゃった……。

も、もらしてねえからな!?

変・態・上・等

「仮面ライダー、フォーゼ」

ボクは胸を二回鳴らしてから、右の拳を墮天使レイナーレに突きつける。

「タイムマン。はらせてもらおう、ぜ………！」

ライダーロケットパンチ。

本物の【仮面ライダーフォーゼ】が使用した必殺技のひとつで、少なくともライダーロケットドリルキックよりも殺傷力はないであろう、さらに単なる飛び蹴りのライダードリルキックよりも殺傷力が低いはずの、最も一誠からレイナーレを引き剥がせる技だ。

この技がベストだと思っただけで使ってみた。思った通りに効果があつてよかった。

………えっ、ジャンピング頭突きがあるだろうって？

威力が低くて空中移動できる技なら、そっちのほうが使いやすいんじゃないかって？

アナザーフォーゼにブースターが使えるのかはわからないし、そもそも背中にブースターがないし、ブースター単体では飛距離が足りないだろうから使いませんでした。

ジャングルジムまで殴りながら運び、ジャングルジムの鉄筋で網にかかった魚のようにレイナーレの肢体を絡み取らせ、動きを封じる。

かつ、一誠とレイナーレとの間にある距離を離し、一誠への不意打ちをされても対応できるように一誠の前に立ち、ついでに一誠にアナザーフォーゼの面構えを把握させないまま勝負をつける。かんぺきなあいであだ。

ここまで徹底的にやれば、なんかちよつとかっこいいモンスターが助けてくれた程度の認識に収まって、レイナーレを一方的にボッコボコにすることができてしまったとしても「モンスターだからしょうがないね」で誤魔化せるはず。

そう思ってたんだけどな。

「仮面ライダーフォーゼ、ですって?」

肝心の至高の墮天使様がジャングルジムの網から脱出できている。

いや、そもそもアナザーフォーゼの、偽物とはいえカタログスペックで低ランクの仮面ライダーながらも五メートルの隕石を粉碎できるはずの「仮面ライダーフォーゼ」のパンチを真正面から受けて、なんで平気で立っていられるのでしょうかね。

宇宙空間での隕石というのは、ただ空中にぽつんと浮いているのではなく、惑星の公転に追従する隕石であれば公転について行けるほどの超高速で「飛んでいる」と表現するのが正しい存在だ。空を飛ぶダンプカー、宇宙飛行士にとつての転生トラックのようなもの。小さくつても弾丸や砲弾並みの威力がある。それが隕石だ。

つまり、当たれば死ぬ。

そんなものが五メートル前後の大きさもあれば、運動エネルギーは尋常ではないパワーを秘めている状態。カタログスペック上はともかく、隕石の宇宙パワー（物理）を真正面から殴り返して粉碎できる時点で、「仮面ライダーフォーゼ」のパワーは頭がおかしいレベルのはずなのだ。

一誠とボク自身の精神衛生を考えて、あえてスプラッターな殺害現場にはならないように、かろうじて小動物の交通事故くらいの認識に収まるような方法としてライダーロケットパンチを選んだ……はず、なのだ。

ないぞうがでちゃったばあいはごめんなさいするつもりでした。

もちろん、今のような状態で立ち上がってくる可能性を想定していなかったわけじゃない。至高の墮天使様に「来世に期待してワンチャンドライブ（拳）」をかましたとしても、意外と平然とした顔で立ち上がってくる可能性は原作にも相応に示されている。

一誠が持つであろう神器、不思議アイテムの「赤龍帝の籠手」は使い手のパワーを倍々ゲームで強化していくと同時に、そんなパワーを誰かに叩き込んだら自分の手足が粉碎されそうなのに肩すら故障しないことから「肉体の耐久力」をも引き上げている可能性のある

代物だ。

デメリットのないパワーアップだなんて、スポーツ選手だったら絶対欲しいだろう、そんな神器は。下位互換の「龍の手」でも十分すぎる。正統派トレーニングの積み重ねありきでの繊細な技巧も何もないドーピングだけど、どちらも超能力ありのスポーツだったら絶対無視されない貴重な戦力になりうる神器だ。

とにかく、倍々ゲームじみた肉体強化から放たれた一誠のテレフォンパンチ。

単純に計算、予測するとどうなりうるのか？

肉体が故障するレベルでの全力を出せないのが人間の肉体なら、それすら超越しうるのが「赤龍帝の籠手」と「龍の手」の能力、“倍加”だ。

前者は倍加できる回数に制限こそ設けられることはあるが、その制限がある間でさえも四回以上の強化が可能である。ようするに、自分の肉体を故障しかねないパンチを最初の二倍で放って、以降の倍加は「人間の腕X本を壊せるほどのエネルギー」がたまり続けるわけだ。それを四回もやれば、単純計算で人間の腕が六本ほど粉碎できる。

その故障加減が関節部分のみなのか、あるいは骨を骨折するほどなのかは別としても、最低で関節部分のみと解釈しても腕六本分の粉碎力は、間違いなく腕の骨を折る。

もう自動車事故とかそういうレベルじゃない。たった四回の時点でだ！

あと一回追加すれば破壊できる腕は十二本となり、そんなものを分散してまんべんなく全身に叩き込めれば人間の肉肉ハンバーグのできあがりだ。

そんなものを真正面から食らってにおいて、回復手段の有無を別としても立ち上がれるのが至高の墮天使レイナー様なのである。

すごいぞボクらのレイナー様。ホントは凄いでレイナー様。

フォーゼの隕石粉碎パンチを受けて平気なものも、これで納得いただけただらうか？

……もちろん、ボクが初めてアナザーフォーゼの力を使っ

たこともある。

思っていた以上に威力を出せなかったただけなのかも知れない。原作でも一誠の人肉粉碎パンチを受けた後は、どの段階でも先ず回復手段を使っておきダメージを帳消しにしていたのだから、きつと自分のライダーロケットパンチが温すぎたのだろう。

それはそれとしても、耐久力はともかく。

「仮面ライダー、ねえ？ どこかで聞いたような、聞いてないような……どっちでもいいわね、UMAであることには変わりないでしょう？」

ぶちぶちつ、と、何かが裂ける音とともに、そのレイナーレ様が立ち上がりつつあるわけなのですが。こちらの隕石粉碎パンチを受けても平然としているわけなのです。

どうして、ジャングルジムの鉄筋を引きちぎれるんですかね？

「うげえっ！ 夕麻ちゃん、細マッチョ的なアレだったりすんの!？」

一誠が後ずさるような音を鳴らす。公園だと、やはり砂利の音が動きをわかりやすくしてくれるからか、いちいち振り返らなくて済む。特撮で採石場が戦う場所を選ばれる理由も、単純に特撮のための爆発物取扱の問題だけじゃなくって、顔を覆うマスクで周りが見えなくなっても気配で演技できるためだったりするんだろうか？

一誠の声に眉をひそめるレイナーレは、心底嫌そうな表情で光の槍を構えた。

「うるさいわね、そんなわけないでしょう？」

これだから人間っていうのは。まあ確かに、私もびつくりしたけれども」

いやキミもびつくりしてたんかい。

とりあえず、聞くだけ聞いてみようか。

「……お前、どうやって、強くなった？」

「【龍の手】。貰い物だけど、やっぱり使い勝手はイイわね」

ぶらぶらとレイナーレは右手を振る。

そこには彼女が持っているはずもない、いいや、奪っていたとしても使っていないなかったはずの籠手の形をした武器があった。

「なあんて言っても、坊やとゴリラのUMA風情じゃわからないわよね？」

なるほど、だいたいわかった。

この「ハイスクールD×Dの世界」でのレイナーレは、物語序盤で殺されていた四人の神器使いから抜き取った神器を積極的に使っていくスタンスだったらしい。

奪われた神器はパワーダウンするものと聞いていたが、一周まわって元の能力が単純すぎると、ひよつとしたら全く使えなくなるということが珍しいのかもしれない。

どこかの英雄志望の誰かさんが、他の誰かさんの神器から目となる義眼を借り受け、「石化させる能力」を劣化させきることもなく使いこなせたのと同じ理屈だろうか？

おそらく、ライダーロケットパンチを真正面から受ける瞬間、その一瞬で「龍の手」の能力で自らの耐久力を倍加したのだ。

一誠の交通事故パンチを受けても立っていられるだけの耐久力ある肢体を倍加でパワーアップさせれば、あの回復手段に頼る必要のない肉盾（自分自身）の完成ということか。

そう考えると、一誠の神器はどこぞの連続殺人犯が使いこなせそうな類の能力な気がする。倍加と別の能力を同時に使って、適当な通りすがりの一般人（異種族）を使つてのガードベント。耐久力は異種族のもともとの倍、再生能力持ちなら回復力も倍加されて実質四倍。

うん、ベストマッチではなからうか。

……あれ、この至高の墮天使（笑）様、ガチで至高の墮天使なのでは？

「でも、さすがにちよつと分が悪いわね。

今ので倍加を使い切っちゃったし、チャージし直すにも時間はかかる。そのゴリラの腕力も未知数、坊やに至っては何の神器かもわからないまま……」

唇に人差し指の先を当てながら、レイナーレはこちらを見定める。まずい、思ったより……レイナーレが神器の扱いに関して

頭がよすぎる。

もし【龍の手】以外の神器も持ち歩いていたら、どんな攻撃手段と組み合わせてくるのかが想像もつかない。堕天使が製造したという人工神器ならば、その能力を使ったり身体から取り除いたりするだけでも体力を失ってしまうデメリットが有るのだが。

普通の神器であれば、そんなデメリットがついて回ることもない。神器の数だけ打ち手が増えるね、では死^{ギベ}ね、がアイサツとして成立しうるのではないか。

「……まあ、しょうがないのかしら。」

時間と場所、あと人員を改めるしかなさそうね」

そう考えていたわりには、実際の彼女の諦めは早かったらしい。

あんまり暴れると、駒王町の人外や超人たちに気づかれるからなのだろうか？

「憶えてなさいよ、仮面ライダーフォーゼ。」

あなたのいないタイミングでも見計らって、そいつを殺させてもらうわ」

レイナーレは黒い翼を伸ばし、一瞬で空高くまで舞い上がると、夜闇に消えていく。

いつの間にか、時間は夕方の黄昏時を極め、そのまま夜へと移り変わりつつあったらしい。

これは、助かったと解釈していいのか。原作以上に厄介な敵が現れたと、頭を抱えるべきなのか。原作通りに馬鹿笑いをする残念っぷりは健在で、思ったより正面突破しやすいだけの隙は残ってそうだと気を緩めるべきなのか。

どちらにせよ、やはり。

“神様”の計画と何かしらの関係はあるのだろうか？

「な、なあ、お前、フォーゼ……だっけ？」

振り返ると、一誠が腰を引かせながら立ち上がり始める。

「なんで、俺を助けたんだ？」

今の言葉を聞いて、ほんのすこし肩の力が抜ける。

体裁はともあれ、原作のヒーロー様からそんなことを訊ねられるとは思わなんだ。

むしろ、そういう理由であれば、彼のほうが一番よく知っているはずなのに。

「……右手、出せ」

「えっ？ お、おう？」

まずは一誠と普通に握手。それを一度握り直す。

「お、おおう！」

すかさず手を離して、握手で丸まった一誠の拳骨に拳を当てる。

「おおう？」

そこから、一誠の手をハンマーのように下から拳で浮かせて、振り抜き、上から拳を降ろす。スイッチを上げ下げする感じを意識して、トントンと。

「おおお……??」

キョトンとした目で見つめる一誠に、わかりやすくサムズアップ。

「……これで、友達。友達、助けるのに、理由がある力？」

さすがに学校の覗きは助けられない理由があるけれど、こういうところにまでセクハラの件を持ち出して助けられないなんて、それこそ人間をやめているとしか言えない。

クラスメイトが目の前にいるなら、無理でも助けたいと思うのが良心。

心の泉が涙なら、良心の痛みからでる涙だって心の泉だ。それを馬鹿にしてしまつては、いつか誰かの優しい気持ちも理解できなくなつてしまう。

そんな歳のとり方は、嫌だなと思いつけていたものだ。前世でも、もちろん今も。

そう、助けない理由はあるけれど、助ける理由はない。

なぜなら、助けたい気持ちがあるから。そういうことなのだ。

「友達……」

なんか熱帯雨林で野性的な生活を営んでいた怪人みたいな声色で

眩いて、そのまま拳をじつと見つめている一誠。どうしたんだろうか、ぼっちではないだろうに。

それとも、どこかの魔剣使いみたいに……やめよう、いくらなんでもありえない。

「それじゃあ、アバヨ」

とりあえず片言っばい喋り方をそのままに、イメージを崩さないまま逃げさせてもらおう。さすがに悪魔とか世紀末魔法少女とかに捕まるのはゴメンだ。

【Jayro ON】

ベルトのスイッチを押し、左腕にジャイロモジュールを生み出して起動する。

音だけならヘリコプターの飛ぶ音や、ラジコンヘリコプターの飛ぶ音に似ていなくもないジャイロモジュールのプロペラの回転音。夜闇に紛れるにはちょうどいいはずだ。

着地するときは、右足のステルスモジュールで姿を消しておこうか。五秒しかもたない代物だから、こういうときには全く使いにくいのが難点なんだよね。

「お、おい、待ってくれよー」

一誠が駆け寄って、大声を上げる。

「また会えるよな、フォーゼー！」

……ちよつと嬉しいな、偽物だけど。

軽く右手を振りながら、一誠の声に答える。

借り物の力でも、やればいけるもんだ。このまま頑張っていこう。

アナザーライダーの原作描写からして、この力は“八年間”しか使

えないんだ。

原作がいつ終わるのか知らないけれど、知ってる話が終わるまでなら十分すぎるほどの猶予期間。できるだけ、友達のことを守ってあげたい。

この、「仮面ライダーフォーゼ」の力で。

「へへっ、友達か………！」

満月の影になりながら、遠くへと消えていくフォーゼ。

あいつの拳はデカかったし、握手する時に見たツラも怖めだし、凶体もやっぱりゴリラみたいでインパクトが凄いけど、悪いやつじゃないさそうさ。

ゴリラって言えば、人間と同じくらいの心を持つてる動物らしいし。

案外、あいつは見た目ほどのバケモノってわけじゃないのかもしれない。

「バケモノってのも、見た目だけじゃねーんだな！」

バケモノ加減で言えば、フォーゼよりも夕麻ちゃんのほうが“らしかった”のは凄いショックだったな。フラれたっつーか、殺されかけたのが一番ショックだけど。

見た目だけなら、黒い羽のエロ天使さまって感じで最高なんだけどな。おっぱいもでかいし、美人だし、なんかあの冷たい目つきもゾクゾクきてたまらねえし！

でも、あのつやつやした肌色の中身はフォーゼ並みのマッチョなんだろうなあ。

ゴリラ系悪女天使さまかあ………ありだな！ 男がたたない気がするけど！

そーいや夕麻ちゃん、なんでフォーゼの方を見て「ユウマ」って言うっ

たんだ？

夕麻ちゃんの名前なんだし、同じ名前なら名字の方を呼ぶはずだし……そもそも、フォーゼの名前はフォーゼだよな？ 「ユウマ」ってなんなんだ？

うーん、同音異義語ってやつ？ 日本語は難しいでありますな。

俺、日本人のはずなんだけど………なんか悲しくなってるな。

やめたやめた、俺らしくねえ！ 考えるのはやめよう！

今日はもう、いろいろありすぎたもんな！

告白されたの嬉しかったとか、デートしたとかフラれたとか殺されかけたとか、公園がめちゃくちゃになったとか、フォーゼと友達になったとかフォーゼが腕からプロペラ生やして飛んでったとか！

俺の頭ん中はいっぱいすぎて、エロ成分が足りないんだ！

カルシウムを取らなかつたら骨がすかすかになるのと同じくらいの大ピンチ！

エロパーテイしないと物足りねえぜ！ 相棒は当然、“右手”だあ

!!

「うっし、エロ本参考書でも読んで寝るか！

美少女とデートできたってだけでも御馳走様だしな！」

「そうか、お前はそういうヤツだったよな」

誰の声だ？

今日って満月だよな、なんか暗くなってきたくないか？

ちがう アツイ 雲？ ねむい？

おれ はら ひかっている つめ？

ねるまえ えろいこと しなき たりな おっぱ いい

あかいな あかい あかい おんなのこ

ちく しよ

女・帝・逢・引

「ああもう、うるっさいなあ……！」

早朝早々、校門の前で騒ぐ悲鳴が頭に響く。

昨日は無理にテンションを上げて戦ったせいか、夜中は全く寝れなかったのもあって、起きてすぐの日差しすら目障りに思えるほどに寝不足だ。

夜中の窓に写った影に「墮天使が来たのか」と思わず身構えて、けつきよくカラスだったと気づいたときの脱力感や疲労感なんかも、ものすごく残っている。

もちろん、それだけで声がうるさく聞こえるわけじゃない。その悲鳴というのが、目の前の野次馬らしき制服でできたバリケードから聞こえてくるのだ。

おそらく、そのすべてがうちの学園の生徒だろう。全員でなくとも、三割が騒げば十分すぎるほどの音量に聞こえてくる。

登校時間に騒ぐんじやありませんよ、ご近所迷惑ですよ。

そう叫びたくもなるけれど、みんなが騒ぐほどの事態が目の前に起こっていることは事実。たった一組の男女が並んで歩いているという、かつては女子校だった駒王学園では決してありえなかった、けっこう普通な今ならではの光景。

その光景に、ボクもまた悲鳴こそ挙げないけれど、それなりに驚いてはいた。

変態の貴公子、この物語すべての性欲の化身。

未来に赤龍帝と呼ばれるHERO、エッチHなエERO野郎、兵藤一誠。

学園三大お姉様、実は悪魔なのに悪女になりきれないヒロイン。

かつ普通の女の子になりたい貴族のお嬢様、夢見る少女、リアス・グレモリー。

彼らが二人ならんで仲良く登校していれば、誰だってびっくりする。

生まれの種族を無視しても、生まれと育ちが庶民と御令嬢で、今現在にはスケベなおっさんになる未来しか見えない野郎と、妙齢の淑女と

なっても女として輝き続けるであろう未来が約束されているも同然の生きた勝利の女神では仕方がないのだ。

目の前の御令嬢の笑顔を見て、「一誠に騙されているんだ」と叫んで現実を否定しようとする生徒たちの声があがるのも。

住む世界が種族的な意味を除いても違いすぎる生き物が、天使とミズが仲良く歩いているようなもので、こればかりはミズが天使に飼われて最終的に飽きて捨てられるような末路しか思い浮かばないし、そこからミズに付き合った天使が泣きを見る未来しか連想できなくなるのも仕方がない。

基本的にヒトは、天秤に釣り合わないものを認めない生き物なのだから。

その天秤を持っている本人が、どんな道理を知り、どんな業界を知っているかが。

天秤に乗せられた側の気持ちなど、かけらも考えない。

そういった意味においては、ああ。

リアス・グレモリーにとっては、今こそが幸せの絶頂なのだろうと見て取れる。

逆もまたしかりだが、良くも悪くも助平心を隠さない性欲に素直な男子とは、残念ながら助平心を隠したふりをしている下心丸出しな男子よりも、女子にとっては一周まわって爽やかに見えることもあるものだ。

もちろん、ちゃんと助平心と向き合っている誠実な人間のほうが、どの性別にとつての異性であろうと、同性であろうと、もっと安心して付き合えるというものなのだが。

大なり小なり男女関係に悩みがある人物にとって、オープンスケベで下心もなく助平心を正直に言えて、相手の魅力を細やかに丁寧に説明できる異性というのは。

どんな善人ぶった見栄っ張り人間よりも、実は敵わない相手なのだとおっしゃる。

こればかりは『そういう経験』がある人間じゃないと分かり合えない。原作の好きな部分だと、リアリティある部分だと正直に言える。

とにかく、リアス・グレモリーにとっての魅力的な男性が、現状は兵藤一誠だけなのだろうということは見て取れる。実のところ、彼女と駒王学園の王子さまの話している姿を見たことはあるのだが、そのときの笑顔は目の前の笑顔とはまったくの別物だ。

スキンシップひとつをとっても、まるでちがう。

あんな朗らかで安らいだ笑顔なんて、少なくともボクが駒王学園高等部に入学してからの今までで、残念ながら一度も見ることがない。正直うらやましいと思う。

問題は、そんな恋愛面のあれやこれやではなくて。

助けたはずの幼馴染が、一誠くんが。

なんで『殺された前提の歴史』どおりに登校しているんだ!?

「……………誰かが、あの後に殺したってことなのか?」

『間違いなく』あり得ること』のひとつだ、目の前のそれ自体は、な』
ぴたり、と、流れる風が景色を歪めるままに停まる。

あれだけうるさかった校門前の大騒ぎも、悴のない一枚絵のように動きがない。

コツ、コツ、と、革靴の地面を鳴らす音が近づいてくる。

『貴様は主人公である兵藤一誠を助けた。』

これにより、ハイスクールD×Dの物語は始まりを変え、たった一枚の契約書^{チラシ}から始まった悪魔たちの物語も過程を変える……………はずだったのだ』

“神様”だ。

白い影が一誠くんへと近づいて、興味深そうに彼の胸元を覗いている。

『兵藤一誠は赤龍帝である以上、赤龍帝としての運命に抗うことはできない。』

この宿命、いいや、[ハイスクールD×Dの世界]における赤龍帝と名のついた因果関係のルールには誰にも抗えん。しかし、この事態は想定内ながら……………』

“神様”は一誠くんの胸を、三本の指でひつかくようになぞる。どう見てもそれは、爪でひつかく動きそのままにしか見えない。それでも、“神様”の指の動きだけで見れば、明らかに死ぬほうがおかしい傷の小ささ。

『実につまらん、誰がやったのかは明白だ』
そんな傷を作ることの出来る武器といえば、ひとつしか思い浮かばない。

純粹にハイスクールD×Dの世界の武器であれば、別にあつてもおかしくはないけれど。

不思議アイテムの神器、セイクリッド・ギアとなるとありえない代物だ。

何の逸話もないし、大した物語もない。似たような武器を生み出せるような動物になる神器もありとなると推理に困るけれど、死因は何であれ、ヒントはたったひとつ。

「まさか………鉤爪で貫かれて?」

ふんつ、と、“神様”に鼻を鳴らされた。

『そこまでわかるなら、話のすべても………わかるだろう? 本当は』

“神様”の姿がかき消えると同時に、一誠くんが驚いて飛び上がる。

「うおっ!? なんだ、今胸がゾクゾクって!」

「あら、私は触っていないのだけれど………いえ、そんなはずはないわ。

まさか、傷口が治ってないのかしら。あれだけ魔力を使ったのに、妙ね………」

キョトンとした顔で周りを見る一誠くんを、心配そうに見つめるリアス・グレモリー。

周りの喧騒が元通りにうるさくなり、先程の一誠くんたちの会話が埋もれていく。

まったく「神様」もヒトが悪い。おちやめなイタズラをして帰っていったようだ。

「あ、「誠くん！」

とりあえず、白々しいけど。

たった今「誠くん」に気づいたかのようなふりをして、二人に近づいてみる。

「あら、兵藤くんのお友達かしら？」

「えっと、こいつは俺の友達のサクローです。月隠朔郎。」

「………つて、なんでお前つ、そこはリアス先輩が先じゃねえのかよ？」

「いやあ、風のうわさで『付き合ってる女の子がいた』つてのを聞いたからさあ！

よーするに、「そういうこと」なんじゃないのかなー？ つてね？

「やっぱ先に聞きたくなるじゃん、聞きたくならない？ 聞きたくなるなるう！」

「やっぱそういうことなんですかね、先輩！ おつはようございませす！」

「え、ええ、おはよう月隠くん………」

リアス・グレモリーを相手に先に挨拶するなんて、するわけがない。こつちが聞きたいのは、体裁こそ友人の恋愛沙汰ということにしたけれど、まずは「兵藤一誠とリアス・グレモリーは付き合っていない」という公の場での発言だ。

こんな調子で一月ほどもクラスメイトたちにうるさくされたら、一誠くんの破廉恥騒動が可愛く思えるほどの女子生徒たちの姦しいうわさ話やら、男子生徒たちの妬み嫉みの声やらを横から聞き続ける羽目になってしまう。

噂話で学園中が盛り上がりすぎる前に、とつと冷水をかけて鎮静させてしまいたいのだ。人間はパンによつてのみに生きるに非ず、されど噂話も過ぎれば酵母の入ったパンと何も変わらず。

そういうのは、日本史を担当する老紳士殿の苦勞にも繋がるし。

事の発端であるスキヤンダルの生みの親には、先輩を敬う挨拶より

も教師を敬うドロップキックをかましたい。ドロップキックをやるくらいなら無自覚な先輩よりも、大事な友達の方を優先して挨拶するに決まっている。

ぶつちやけ、この状況が嫌なのさ。マジで。

「えっ!? い、いや、俺とリアス先輩は、そのっ!」

「たまたまバッタリ会って、なんとなく話が合っちゃったのよ。

話に聞いていたのより可愛いから、つい、こう『ぎゅっ』って……ダメかしら?」

「あく、なるほど、そーですかー……だいたいわかった。

よかったね一誠くん、エロ野獣からペットに格上げしたっばいよく?」

「なんで残念そうな目で見るとだよ!」

なるべく大きな声で一誠くんに話し続けていたからか、話の内容を把握した生徒たちが「なんだそういうことか」と、ひとり、またひとりと校門をくぐって、野次馬の群れから離れていく。

気のせいか、自転車に乗っていた主婦らしき人たちが頭を下げ通りがつっていった。

それでもまだまだ野次馬の群れは多すぎるようで、通りすがれるだけの道の幅も自転車一台が通れる程度という大混雑。どうやったら減らせるものかな、野次馬の数。

「いやあ、だって一誠くんさあ、ほら。

ジャーキーももらえるって思ったときの犬に似てるじゃん。

エロ本を拾うときの顔つきとか、風が吹いたときの女の子を見る目つきとかさー?

それが可愛かったんじゃないの、たぶん。気持ちはわかるし」

「おっ、お前、まさかそういう目でっ」

「そういう目って、どういう目っ?」
何のことを言っているんだろう、という怪訝な目つきで見つめるのを忘れない。

こういう仕草のひとつも見せないと、この学園の発酵しまくったらフレシアの花の群生地が大変なことになる……なんていうの

は、もういい加減に対処に慣れてきた。

どうせ、この野次馬の群れに紛れ込んでいるのだろう。見慣れたメンバーが隠れて見ているのは気づいちゃいた。きつと、見慣れない隠れ腐女子たちもいるかもしれない。

今の対応は今の対応でネタにされてしまうのだからうけれど、こういう仕草で「そういうネタ」を連想しようとした連中に罪悪感を抱かせないと、ネタにされるなりに騒がれ加減をコントロールしきれないままに面倒な事態になってしまう。

いや、本当に苦労しているのだ、別に学園の王子様みたいなキャラではないのに。

どうも彼女たちには、エロに目がない野犬と、その野犬に話しかける純朴な室内犬みたいな体裁に見えるらしい。本当に困っているんだ。

ボクと一誠くんの同人誌とか、見せられたの二度や三度じゃないからね。

「あつ、やばい、朔郎くんがチベスナみたいな目になってきた」

「退散よ退散っ！ これはこれで濡れるけど・・・」

「ばかつ、なに口にしてんのよ、先生にチクられて検挙されちゃうわよ!?!」

「許してくれるうちが花なのよ、同人活動は!!!」

わいわいと周りの喧騒の半分ほどが校門をくぐり、校舎へと走り去っていく。

「ええっ!?!」

?
いやいやいやいや、半分もそういうの狙いで立ち止まってたわけっ

さ、さすがにそれは、通行の妨害がすぎると思うんだけど
なあっ・・・?!」

今のは、いくらなんでも先生たちになにか言われたら擁護できないぞコレ。

見てみないふりが通用するのも、そろそろ限界がきてしまうのではないだろうか。

彼女たちへの今後の対応をどうしたものかと考えていると、さつきまで様子をうかがっていたリアス・グレモリーが話しかけてきた。

「あ、あの、なんだか……ごめんなさいね？」

急な話で悪いのだけれど、すこし訊ねてもいいかしら」

「え、あつはい」

今のごめんなさいは、どっちの意味なのだろうか。

こちらへと近寄るリアス・グレモリーは、じつ、とボクの目を見つめる。

「仮面ライダー」

小さく、蚊が鳴くような声でつぶやき続ける。

「UMAだったか、都市伝説だったか。

そんな名前の存在を、どこかで聞いたことはないかしら？」

神妙な顔で訊ねてくるものだから、何事かと思えば。

なんだ、そんな程度のことか。未だに、その程度の問題でしかないのか。

「首なしライダーなら知ってますよ？ 池袋とかの」

「……そうよね、どっちかっていうと、そっちのが有名よね。

私も初めて聞いたのよ、仮面ライダー。なんなのかしらね？」

不思議そうに首を傾げると、踵を返して、一誠くんを抱き寄せたまま歩き去ろうとしていた。はたから見ると、一誠くんが攫われているようにも見える。

「あつ、ちよつ、リアス先輩っ!？」

うへへ、やっべえ、夢に見たおっぱいが……じゃなくつて!

サクロー! あとで教えるから、お前にも、昼休みに! 仮面ライ

ダーな!」

「りよーかーい」

もちろん、そんなものは知っている。

転生してもなお色褪せない、正義の血潮の赤いマフラー。

今生の世界では耳にすることもない、一誠くんにとっては似たような立場にある戦士たちの代名詞。混じりけのない世界のHEROの

名前。

その偽物であるボクが、知らないはずもないけれど。今は、口を閉じていよう。

「つていうか、リアス」先輩「つて。」

ライトノベル、読んだ……??」

「あの子、ちよつと変わった子だったわね」

リアス先輩が俺の腕を抱き寄せたまま、階段を登る。

ああ、至極の白い宝玉が、リアス先輩のおっぱいが！

たゆんだゆんと動いている感触が伝わって、俺、このままじゃ天国への階段まで昇つちまいそうだよ……。

「そつ、そうっすかね？」

あいつ、テンション上がるとああなりますよ？

そーじゃないときは静かで、図書館が似合いそうな感じの。

なんかそんなヤツなんですよね、楽しいのが好きなのに物静かなつていう」

「いえ、それは別に普通だと思うわ。」

うちの部の子もどつちかつていうと、そういう子だもの」

「へ？先輩の部活ってどこなんですか??」

そういえば、学園三大お姉様って呼ばれちゃいるけど、放課後のリアス先輩の部活だけは誰も知らないんだよな。知ってるひとは知ってるらしいけどさ、だいたいみんな黙つちまうし、むしろお前らには教えないって言って蹴っ飛ばされるんだよ。

ひつどいよなあ、そりゃあ、覗きとかやってっけどさあ。

そんなことにまで覗きとかの件を持ち込むもんなのかよ？ 納得できねえ！

「あら、それは秘密よ。」

「いずれ、あなたを部員のみんなに紹介するつもりなのだから……
あなたがどこの部活なのかを知っちゃったら、みんなへのサプライズ
にならないでしょう？」

「り、リアス先輩が人差し指を唇に当てて、くすくすつて！」

「俺なんか、俺なんかリアス先輩が笑いかけてくれただって!？」

「その笑顔は妖艶さすら感じさせる、いかにも〝小悪魔〝っぽい笑顔
だった！」

「これで俺より一個上で、今の今まで一緒にベッドで起きて、一緒に
学校に行って、俺の友達とも一緒に喋っている現実の美少女！ 昨日
の夢が嘘みたいなの幸せっぷり！」

「ゆ、夕麻ちゃんの件は、その、〝死ぬ夢を見るくらい〝すげえ辛かつ
たけどさ。」

「やばい、今日は、本当にリアス先輩に殺されそう……。」

「やっぱり何かが変わね、あの子。」

「あんな事件の後だもの、証拠を残すはずもないし。」

「例外なく〝処理〝はされているはず、なのよね……。」

「この子の友達だから、面白い子なのかしら。それとも……。」

美・男・暗・躍(?)

ときは穏やかに過ぎ去り、放課後。

老紳士先生の授業で歴史雑学も交えた知識を学んでいる間、どうい
うわけか一誠くんを含めた色ボケ三人衆が騒ぎを起こすこともなく、
非常に集中できたからなのか。

たった数科目ほどのための学習時間が濃密ながら、破廉恥騒動に頭
を悩ませる時間をやりすぎしながらチャイムが鳴るのを待つ日常の
濃密さとはちがう「楽しさ」があったからなのか。

ひと科目の終了だけで朝日を見上げるときの爽やかさがあった。

……そうだよ、こういう時間だよ。

元がお嬢様学校で偏差値が高めの場所なんだから、このくらいの充
実した勉強ができるはずなんだよ。そりゃあ生徒会のメンバーが必
至になって後処理を頑張るよ。

ある意味では異形の一種とも言えるボクでさえ、普通に生活してい
るだけなのに勉強が楽しくて、確実に夢に活かせる知識や歴史に夢を
抱ける知識を得ることができる学校にいるんだ。そんなのうるさく
されたくはない。

生徒会にいる転生悪魔たちは、そのうえで社会進出前提で悪魔に転
生している連中なんだから、きつと破廉恥騒動のときの煩わしさへの
悪感情はボクの比ではない。

他の転生者たちが戦う力を持っていたら、生徒会みんなのように
我慢したりしないで殴りかかっていくのだろうか。

だからといって、彼らと友達であることをやめるつもりもないけれ
ど。

「やつほー!」

一誠くん、松田くん、元浜くん。

大富豪やろうぜ、大富豪。効果カード全部ありで!」

どかん、と、教室の扉を回し蹴りで開けて、強制的にドスケベ三人
組の目線が集中するように大声で話しかける。もちろん名指しだ、無
視したら許さんぞとばかりに詰め寄るためのクラウチングスタート

への準備も欠かさない。

いろんな方向から聞こえてくる安心したかのようなため息や、緊張がほぐれたかのような空気の变化を把握しながら、一誠くんの席に目を向ける。

「サクロー！ 頼む、元浜を止めてくれ！」

「無い乳の話とかつまんねーんだよ、どうにかできねーか!？」

そこにはメガネを何度もくいくいと上げ下げしながら、一誠くんや松田くんに詰め寄る元浜くんの姿があった。一誠くんの机周りの床には官能的な雑誌が散らばっていることは見て取れるものの、肝心の机の上には、明らかに床にあるものと方向性のちがうものが置かれていることが見て取れる。

漫画雑誌であることは確かなのだが、どう見ても見た目だけで言えば、内容は。

「サクロー氏イ！ 今ちよつとロリについて重要な講義をしているん

なるほど、だいたいわかった。

即座に手持ちのランプをポケットに入れて、別のポケットから絵柄の異なるランプを取り出す。こんな事もあるうかと、備えあれば嬉しいな。

もとよりサルコシントリオは「おっぱい派」「セクハラ派」「ロリ派」に分かれ、混沌を極めることなど珍しくもない。

「ロリきゅーぶっ！」の「きゃつとのあな」特典ランプでだア!!」「乗ったアツ!!」

そういうときに頼りになるのは、別にR指定などないライトノベルのイラストの魔力。

いいくにつくろう オタク文化。三人を相手にするならば、三人にベストマッチするランプなりウノなりを用意するに越したことはない。

ついでに、そのグッズを使って盛り上がるようなゲームも選出すればよいのだ。

「た、助かったぜ、リアス先輩の、げふつごふつ！」

とにかく、ああ、そうだな大富豪だな！ マジで助かったよサクロー！」

「ええ〜っ、ロリきゅーぶのトランプかよお……………痛っ!?」
「な、なにすんだよイツセー?」

（確か、おっぱい大きいエロ先生の絵もあるやつだったはずだぜ?

俺、前に読ませてもらったんだよ。ありやあけっこう……………うへへ……………）

（て、てめー、リアス先輩のものじゃ飽き足らず二次元にも手を伸ばすのかよっ?!）

……………なんか二人がわちゃわちゃしてるけど、気にしない、気にしない。

急にひそひそ話をして、二人揃って鼻の下を伸ばしているところなんて見ていない。

元浜くんも少し冷たい目になって、二人のことを見ていた。

あくまでもロリコンである彼にとって、相容れない性癖に抵触しやすい二人の暴走はものにもよるのか、だいぶ反応が周りの人に近いものがあるように見えた。

「哀れな。」

あの女史は保護者であって、そういう目で見るべき相手ではないというのに……………」

あ、ちがった、これ単純にファン視線での性癖談義だ。

相変わらずエロが関わりと面白いコメディを見せてくれるなあ、と、三人のやりとりに気を遠くさせかけつつ、トランプを元浜くんに預ける。

「シヤツフルは元浜くんに任せるよ、新品だよ?」

「マジか、マジなのか、いいのかサクロー氏!」

「うん、エロはともかく、作品が好きなもの同士ってことで!」

ひゃっほいと飛び跳ねる元浜くんからも目を背けて、こちらの様子をうかがう一誠くんのクラスメイトに右手で親指を立て、サムズアップを作る。

何人かのクラスメイトが意味を察して、机の陰や友人の陰からサム

ズアツプを見せた。

Complete、ラブアンドピースな下校は彼らのゴールになれたようだ。

やっぱり一誠たちには、真正面から殴るよりも悪乗りにも悪乗りで対抗して、そのまま変態と相乗りして話を逸らすほうが効果的に対処できる。

「よーし、それじゃ、トランプを配るぞ皆！」

シャツフルが終わったのか、なにやら満足げな顔で元浜くんが雑誌を片付ける。

しかし片手間で片付けていたせいなのか、右手のトランプが表裏ひっくりかえって掴まれているのが見て取れる。ははあん、さては彼、絵柄を楽しみながらシャツフルしてイカサマの仕込みでもしたな。

「ほほおん……」

いい度胸だ、ファンとしては感動的だな。

だが、テーブルゲーマーとしては無意味だ。

大富豪でイカサマをしても、人数はたったの四人。五人ならばともかく、四人というのが無意味さを生み出させる最大の原因になっていることに気がついていない。

ジョーカーを含めて五十二枚、五人に配れば約十枚、四人に配れば十三枚ずつ配られることになり、たった三枚ほどの手札の違いは引き込むカードの確率さえも大きく変える。

引き込んだカードが五以下の数札であれば、五飛びと革命下での三と四で十分に逆転可能である点は五人に配った場合と同じであるものの、誰か独りにそれらを固めて送りやすい四人の場合、五人の場合よりもどうしても十一の絵札による効果、イレブンバックで一時的に革命と同じ状況に持ち込まれた際に、固めて送られた側が一方的に勝ち進むことができってしまう。

イカサマで仕込んで相手に送りつけるならば、数札の六、九、絵札の十二と相場が決まっているのが大富豪。三の倍数のカードに限って、すぐ上のカードに強力なカードがあり、すぐ下のカードにも効果

カードが有るからだ。もちろん三の数札を除く。

それらは革命だろうとイレブンバックだろうと問題なく手札に余らせ、送りつけた側が優位に効果カードを切り札に出来る組み合わせ。元浜くんのイカサマは、残念ながらそれを熟知しているイカサマとは思えない。

一誠くんも松田くんもエロ妄想の内緒話に夢中で、元浜くんからイカサマをされている可能性には気がついていない。

この勝負……もらった！

「あ、あのく、どの彼が兵藤くんなのかな？」

「ちよ、ちよっと待って、キミヴアデイレ、いドゥノマイキデテイノ
!？」

凜としているような、穏やかなような声色が教室に染み入る。

わいのわいのと四人で騒いでいるところに、なぜか割って入ってきた北欧系美少年の声が鼓膜に激突してきたら誰だって驚く。ボクだって驚く。

そもそもクラスメイトの誰もが、この彼とは関係のないはずの人間ばかりだ。

……ぼかんとしている一誠くんはともかく、ボクを含めた“人間”の皆は、少年のものと呼ぶにはふさわしいが男性のものと呼ぶには難しい髪質をもつ、目の前の美少年に声を失っていた。

「えっと、その……僕、なにか変なことでもしたかな？」

どうして彼が入ってくるまで、うちのクラスの腐女子たちが騒がなかったのか。

どうして彼が入ってくるまで、うちのクラスの婦女子たちが騒がなかったのか。

しん、と静まり返った教室で、教室の隅で女子生徒の桐生さんがぼつりとつぶやいた。

「いや、あんたらが騒ぎすぎてたから、みんなに気づかれてないだけだし。」

木場きゆ、木場先輩はなんも変なことしてないっすよ。空気だっただけっす」

ああ、なるほど。

「そ、そうなのかい？ よかった、びつくりしたよ。」

「……僕の名前は木場裕斗。グレモリー先輩からのお願い事だね、兵藤一誠くんを連れてくるように言われているんだ。キミたちのうちの誰かだとは思っただけど……」

「グレモリー先輩……リアス先輩！」

「そうだ、そうだよサクロー、お前らに仮面ライダーの話がしたかったんだ！」

一誠くんがボクを見て、なんだか楽しそうな表情になる。

今にも仮面ライダーについて、おっぱい談義並みに長く話しそうなノリの勢いだ。

一方で、木場裕斗が眉根を寄せ始めていた。あんまり長く待たせちゃいけないような用事なのだろう。もう、それがなんなのかは予想がかった。

「仮面ライダーはいいから、用事を済ませにいきなよ。」

美女のお誘いに美少年の使い、少女漫画もびつくりな超展開じゃん。

「早めに戻ってきてね、四人揃ってないとノリが悪くなるからさー？」

「そうだぞ、またグレモリー先輩かって思っただけからな」

「我ら非モテ組で美女に陥落するとは……しよせんはイツセー、我ら四天王のうち股ぐらが最弱の男よ……」

「元浜くん、ホ○ツキーの先が逆だぜ。それだとチョコの味がしない」
「しれっと学校にお菓子を持ち込んでボケる元浜くんも、けっこう準備がいい。」

その気遣い、ノリのための下準備、全部女の子への優しさに変えたら絶対モテると思うんだよなあ彼。やっぱり、なんか一誠たちは全員残念すぎると思う。

「えっと、ねえ、本当に僕って悪いことをしちやったのかい？」

「木場先輩はいいから、アタシが一誠の代理でやるんで！」

ほら一誠、すぐに行行って戻ってこーい！ いやほんとマジで急げ？」

「お、おう！ いこうぜ、じゃなくって、いきましよう木場先輩！」

どかどかと走る一誠くんを追う、木場裕斗。

この学園は、けつきよくのところ本来の歴史のとおり巡るらしい。

それは別にいいのだけれども、なんだか昨日頑張った意味がないかのような気すらして。モブキャラでもいいんだけど、正直なんだかやるせない。

「一誠くん、モテモテですなー。」

元浜くんホ○ツキーちようだい、いややっぱいいわ、ノれない」

「あからさまな嫉妬、ネタにされるぞサクロー氏？」

「なんの？」

「気づかないほうがいいぞサクロー」

「え、松田くん、なにを？」

『まったく、我が契約者も間抜けたものだ』

駒王学園の校舎を見下ろす白い影。

電柱の上に立ち朔郎の姿を捉えていた“神様”は、困ったように肩をすくめていた。

『今朝の出来事は、確かに今朝に起こりうるものではあった。

だが、「原作においては、もう少し数日経ってから起こるもの」だったものだ。

転生して通常通りに生活していたせいとか、やはり原作に関しての記憶に劣化が見れる。まだ兵藤一誠は、墮天使ドーナシックに襲われてすらいないというのに……』

どこからか文庫本を取り出すと、ページをめくって、ある挿絵が見えたところで指を止め。そこからページを逆にめくり、ある文字列が記されたページにしおりを挟む。

『いや、その点においては、他の契約者も同じ話か。』

むしろ、あらゆる物語の始まりを正確に覚えている転生者のほうが稀有なもの。

誰もが起きてすぐの物事は正しく憶えていないのと同じように、あらゆる物語の始まりをしかと覚えているものもまた少ない』

そのしおりには、四文字の数字がいくつか並べられていた。

2003、2010、2011、2013。はつきりと読める数字はこれら四つのみで、ほかの数字は指の脂で滲んでしまったのか、なんと書かれているのかはわからない。

『その後に動いた運命にばかり、気を取られてしまうからだ。』

運命こそが物語の醍醐味ではあるのだが、しかし、あの契約者は先を急ぎすぎた。大まかな物語の記憶にばかり頼るせいで、正しい時の流れを自ら捻じ曲げ、自分の計画を乱し始めていることに気づいてすらいない。

まだ我が契約者のほうがマシな程度か……』

『さて、あの契約者はどうしていることなのやら。』

我ながらろくでもない間違いを犯したものだ、せめて我が契約書の進言をまともに聞いてさえいればアナザーフォーゼの誕生より前に、ここまで事態が悪化することもなかったというのに。やはり私は、『

文庫本を閉じる。

その文庫本は大量の付箋が差し込まれており、見れば見るほど何度も読まれていたことがわかるほど、ページの端が黄ばんでいて表紙の色が抜けてしまっている。

表紙の一枚絵に至っては、もはや誰の髪が何色なのかもわからない。い。

そうなるまで使い古されていたからなのか、一枚の付箋がこぼれ落ちる。

『【仮面ライダー】というものを、軽く見すぎていた』

2015。

橙色の付箋は風に乗れ、どことも知れぬ場所へと旅立っていった。

令・嬢・表・裏

旧校舎のどこかにある部室。

シエルターとしての機能も充実しつつあるオカルト研究部では、三人の少女が椅子に座って同じキーキを食器で突いていた。

……この場合のシエルターとは、防御力あるものだけを指すものではない。

有事の際の生き残りを前提に考えた、生命維持に長けた建築物を指す。

日常的な生活スタイルを狂わせることなく、正気を保つ。これは後の彼ら彼女らの物語に置いて、非常に重要な機能を果たしたと言っている。

きつと彼女たちであれば、外宇宙的な恐怖にさえ立ち向かえうるだろう。

だからこそなのか。

明らかにありえなかった未知なるUMA、「仮面ライダー」との遭遇を果たした“兵藤一誠”、その兵藤一誠を襲った墮天使らしき少女。

裏の事情を知るものであれば混乱をきたしうる情報、それらの乱立すら可愛げのあるものへと変わる、さらなる謎の解明を始めていた。

「どういうわけか、彼……月隠朔郎くんだったかしら。」

「『一誠さんの彼女』の記憶」が残っているのよ。噂話でしか聞いてないと言っただけだけれども、それでも記憶を処理されていないというのは気になるわ」

「あらあら、それは面白いですわね。」

部長、その時の細かい話、思い出せますか？」

部長と呼ばれた紅髪の少女に、ポニーテイルの少女が問いかける。

「ええ、確か、——」

誰が墮天使の協力者なのか。

学園内部の生徒や教師、用務員であるならば墮天使ではなからう、しかしスパイが誰かも分からない状況にある今、最も怪しい人物とは「墮天使に狙われるほどの神器を持った少年」ではもちろんない。

実は墮天使勢力の内部で分裂・抗争が起こっているかもしれない、彼はその被害者かもしれない……とも憶測を並べることもできらるだろうが、それよりも怪しい人物が現れたのだから致し方がない。

これはいわば、凡ミスをやらかした「ある学生」の自業自得でもある。

兵藤一誠に彼女が出来た、それを覚えている“人間”はいないはずなのだから。

あるUMAの正体でもある月隠朔郎が、そうであるとも知られぬままに墮天使との関与を疑われてしまうのは致し方のないことだった。

「——、っていう内容だったわね。」

一誠くんの友達なら、墮天使が記憶を処理しないわけはないわ。

だからこそ、今みたいに覚えていることのほうがおかしい。彼に記憶改竄に対して耐性があるのかとか、あるならあるでどうやって防いでいるのかとか、墮天使と関わっているかどうかとか……調べるだけ調べておきたいのよ。

そのためにも、初めはあえて記憶操作のために接触をするべきだと思うわ」

「なるほど、それは納得ができませんわ。ところで部長？」

もしもの話ですが、彼が単純に、記憶を処理され忘れていただけの場合はどうなさいますの？」

「えっ？ そんなの、あり得るはずはないと思うけれど。」

そうね、それはもちろん、記憶を消して誤魔化すわね。

悪魔や墮天使、記憶操作。そういった説明も忘れてもらって、今までどおりの学校生活を送ってもらいたいから……この部室での記憶を消して、裏の社会から離すのよ」

「なるほど、それなら話は早いですわね。」

当然、反対ですわ。うまくいきはしないでしょうし」

「朱乃?! そ、それは、どうしてなのかしら?」

『兵藤くんの彼女の記憶』をさっぱり消すと、それはそれで『兵藤くんの彼女について話した瞬間の記憶』までなくなつて、結果的に違和

感を感じるかもしれませんわよ？

具体的には、そう。部長と話した、『校門の前での出来事』を忘れて、あの騒ぎの中から『どうやって校門をくぐっていったのか』を思い出せなくなるのか。

ひよつとしたら、騒ぎがあつたこと自体をさっぱり忘れてしまうかもしれませんわよ？

そんな時、同じ騒ぎの中で登校した生徒が、部長について話を始めたら？

きつと、すぐに違和感を感じますわよ。

自分はどうやってその騒ぎの中を登校したんだろう？そこを思い出せたとして、自分はどうして、兵藤くんと部長が登校している時に話しかけたんだろう？

あの二人が彼氏彼女の関係だなんて、どうして勘違いしたんだろう………そもそも、なんの話をしたんだろう………なんて、ね？」

あつと、紅髪の少女——リアス・グレモリーは気がつく。

記憶改竄を行う上で大事なのは、元の記憶そのものをまるごと上書きすることで、消された時間に本当は何をしていたのかを思い出せなくさせてしまうこと。偽りの、思い出させる記憶を作ることだ。

本当になにもかもなかったことにしてしまえば、改竄した側の把握していない何らかの物事を、改竄された側が思い出すために記憶から掘り起こそうとした際に、決定的かつ致命的な記憶の矛盾に気がついてしまう原因になりうる。

たとえば、学内での休み時間に誰かが友達と何かを話していて、その最中に兵藤一誠は隣でエロ本を広げ始めたとする。そのタイミンで誰かのグループが兵藤一誠への嫌悪感を抱いたとして、そこで話題が本来の話題とは異なる内容を話し始めてしまえば、本来の話題は途中で遮られたまま終わってしまう、兵藤一誠をきっかけとした別の会話が始まるわけだ。

もしもこの翌日に、「昨日この話をしたよね」とグループの誰かが口にしたとしよう、そのグループの全員が記憶を処理され、兵藤一誠に

関する記憶をなくしているとする。

ここで確かに「昨日はここまで話した」という記憶が残っていて、かつ「何を理由に話を打ち切ったのか」を思い出せれば、そこで大きな違和感を抱くことはない。

しかし、もしもグループ全員に記憶改竄を施したとして、よりにもよって「昨日の兵藤一誠に関する記憶」を消してしまっていた場合。そのグループ全員が、「何を理由に話を打ち切ったのか」を思い出せなくなり、ここで全員が「どうしてそれを憶えていないのか？」と違和感を抱くようになってしまう。

そうなってしまうえば、自分たち裏社会の存在が潜んでいる可能性を悟られてしまい、芋づる式に調べ上げられて悪魔の証明を実現させられてしまいうる。

それだけはいけないのだ。だからこそ、記憶改竄を施すならば、偽りの、代わりとなる記憶を植え付け、誤魔化しきらなくてはならないわけだ。

「そもそも『兵藤くんの彼女の記憶』ありきの会話ばかりをリアスと話してしまっていますし、そのあたりまで帳尻を合わせた記憶の改竄ができる技量の持ち主となると……たえ騒ぎの中を掻い潜って登校した、という記憶だけをいじるにしても、騒ぎが騒ぎですもの、駒王学園に所属する悪魔や悪魔関係者ではできる者がおられませんわ。それこそ、堕天使のエージェントでもない限りは難しい話。むしろ……」

原作で言うところの、「大量の兵藤一誠が現れた」という記憶改竄の失敗例と同じだ。誤魔化す記憶の帳尻を合わせきれなくなれば、いくら埋めても消しても解決できない。

かの堕天使総督でさえ、どんなに頑張っても記憶改竄しきれない限界というものがある。逆に言えば、その限界に至るまでであれば改竄できる領分と言える。

今回のケースは同じ人間が大量発生したわけではない。まだ現実的に、ある程度は「兵藤一誠やリアス・グレモリーと話した」という事実を無理に変えて、他の生徒に話題にされてしまってもすれば破綻

するような真似をするまでもない。そのためだけに、生徒全員の記憶を操作する必要さえもない。

ある程度の論拠となるものさえあれば、ギリギリ修正は可能な範囲だ。

問題は、その論拠をもって筋書きを描けるだけの改竄の腕前を持ったプロが学園にはいないということ。もうプロに依頼する以外の方で解決ができない事態になっていたということだ。

となると、ここまで問題を複雑化させた原因はひとつしかない。

「そうですわね。」

“リアスが長く話していれば”、記憶改竄はしやすかったのではありませんか？」

「わっ、私のせいだって言うの!?!」

「あらあら、確かにそう聞こえますわね？」

わざわざ兵藤くんとリアスが並んで登校して、兵藤くんの彼女かもしれないリアスが兵藤くんの彼女かどうかを確認するために話しかけてきた。

そういう動機ありきの会話から始まった以上、そこを改竄できるだけの会話内容を事前に用意するだけの算段もなかった辺り、無策で兵藤くんと一緒に登校してしまったりリアスの確かな落ち度…….かも、しれませんかねえ？」

笑みが過ぎずつ嘲笑や怒りを帯びたものに変えつつあるポニーテイルの少女、姫島朱乃は困惑しているリアス・グレモリーへと、細めたまぶたの奥底にある目を向ける。

「うふふ、改竄をしようにも、リアス。」

あなたは『仮面ライダーなる未確認生命体を知らないか』と訊ねておしまいにして、そのままウキウキと楽しそうに下級生と一緒に置いてけぼりにしたのでしよう？

改竄したくとも改竄をするためのもとなる会話が少ない状態で、どうやって会話内容を別のものだったと誤魔化して『兵藤くんの彼女』に関する記憶を消して『兵藤くんの彼女』に関する会話をする目的で近づいたというきっかけさえも変えられるというのかしら。

リアスが兵藤くんの彼女になったかも知れないという先入観をどうやって好意的に抱くのでしょうか、先輩と後輩の関係で、ただでさえ他の子達がそう思い込みかけても自分で否定したがるような状況だったというのに？

そういつた話は先に知っていたからこそ、あるいは心の底から兵藤くんの幸せを望んでいたからこそ、驚愕に慄くことなく話しかけられるものなのですわ。

記憶しか弄れない我々の魔法で、どうやってその気持ちがある前提で記憶を弄れるのかしら。心を操ることなんて、悪魔にも天使にも、墮天使にもできないというのに……？」

「う、ううっ」

「つまりと、リアス。

これ、やっぱりもう完全にあなたの凡ミスなのではありませんの？」

「うううっ！」

リアス・グレモリー、痛恨のミス。

もつとも相手方の月隠朔郎も未だに自分の凡ミスに気がついていないので、お愛顧ではあるものの、ここまで情報が入り乱れている中で即座に新しい情報を得るために腹芸をしろというのも無理があったのかも知れない。

「な、なにもそこまで言わなかったっていいじゃない！

あなただって、その、ひよつとしたらよ？ 可哀想な子だけど、真面目に言うわ。

ひよつとしたら、墮天使に狙われるくらい凄い神器を持った後輩が眷属にできるかもしれないっていうビックチャンスなのよ？ 【悪魔の駒】は使っちゃったけど、それでも兵士の駒が8個分、育て上げればライザーとの婚約だって破棄できるかもしれないわ！

もちろん駒何個分でも彼を見殺しになんてできないし、はぐれ悪魔にさせるわけにはいかないし、その、ひよつとしたら下手な悪魔貴族のお坊ちゃんよりも信用に足る男の子にまで成長してくれるかもしれないじゃない！

逆光源氏ってやつよ、駒8個ぶんの悪魔の眷属で後輩の男の子で！
こんなのでどうやって期待しないで舞い上がるなっていうのよ!？」
「そこで裕斗くんを引き合いに出さない辺り、ちよつとどうかと思ひ
ますわよ」

「裕斗くんもアリだけど、横から突然のダークホースは予想外すぎる
のよ！

だって、だって、イケメンで騎士でいろいろと受け入れてくれそう
な後輩の男の子な裕斗くんでも、駒価値の総数で上回ってきた一誠く
んの潜在能力と恋愛関係の一途さとか、なんか裏で変なこと考えてい
るわけじゃないお馬鹿な弟くんって感じの気持ち悪すぎない男の子
心とか！

そんなの土俵が違いすぎるわよ、一誠くんが私に近づきすぎてるの
よ！ 恩があるからって一歩引いてる感じじゃないし、そもそも後は
誰が先に上級悪魔貴族になれるかどうかの徒競走じゃないっ、引き合
いに出したくたって僅差があっても裕斗くんとほぼ同じ距離間のス
タートラインに立ってるのよ、一誠くんのほうが!!

むしろ裕斗くんと同じレベルで私の心に食いついてこれているこ
とのほうが凄いのよ！ 引き合いに出さないんじゃないの、出しちゃ
うと方向性が違うから比較に困るの!」

「.....部長、さすがにちよつとキモいです」

「キモっ.....!?!」

何気ないネコ妖怪の一言が、悪魔令嬢の心を傷つけた。

会話に今まで参加せず白いケーキに食らいついていた白髪の少女
は、自分の食い意地を恥じることもなく、目の前のわかりやすい醜態
に忠告をした、つもりのようだ。

見かけが華やかな紅色の白鳥とは言え、しかし乙女であることは確
か。いや、むしろ「乙女になるまで恋をしたことがない」とすら言え
るほどの、下手をすれば喪女一歩手前の女子高生だ。

知り合いが“種まき焼き鳥”と、“戦闘狂手前の親戚”といった異
性ばかりの。

そんな彼女の逆光源氏計画とは、言ってしまうえば「恋愛なんてした

ことがない女の子の、まともな異性すら知らないお嬢様の非常に痛くて下卑た妄想」になりかねない（スクールカースト的な意味で）諸刃の剣。

素直に好きな相手には好きって言って、そのまま悪魔貴族らしく育つの待てばいいじゃん、回りくどいこととして選り好みしている場合じゃない？

そういった答えがさすがに浮かびやすいのか、「姉」が「部長」と似たような発想をしやすい一方で積極的な行動力のある恋愛観を抱いていることを知っているからなのか。

残念ながら、このネコ妖怪には容赦がなかった。

忠告と書いて、その実は毒舌である。

（でも、ちよつと微笑ましいですわね、子猫ちゃん）

（・・・そうですね、裕斗先輩への考え方はともかく、恋愛関係であそこまでテンパって正直に言えるくらいにはこう、普通の女の子らしくしている気はします。

やっぱり、キモいは言いすぎでしたか？）

（楽しかったので問題ありませんわ）

（うわぁ・・・）

そして、この副部長も容赦がなかった。

などと二人が目配せしながら会話している間、当のリアスは「キモい・・・子猫にキモいつて言われた・・・」と、どこか遠い目で部室の天井の溝であみだくじを始めていた。

現実逃避も過ぎれば危ない人である。

恋愛が関われば、男女問わず気分が浮かれるか、緊張しすぎて冷静を失うもの。

これまでの悪魔貴族の御子息から受けた印象はともかく、形はともあれ異性に関心を持ち始めた御令嬢にとって、初心な迷える乙女心にキモいの一言はきつかったようだ。

「・・・とにかく、サクロー先輩の件はどうするんですか？」

「呼ばない、ということにするべきですわね。どうしますの、部長さん？」

「はっ……!!?」

朱乃に声をかけられ、ようやく天井の溝の世界から返ってきた。軽く頭を振って、空想の世界独特の浮遊感を取り除くと、姿勢を変えて床を踏み直す。

「なによもう、せつかく面白い子の友達なのに……」

本当にどうして、記憶処理を受けても憶えていたのかしらね?」

『単純に、リサーチの外にいただけだろう』

「……ほう?」

どことも知れない暗がりの中。駒王学園にあるはずもない場所。

ステンドグラスの虹色の輝きは“神様”と呼ばれる白い影を照らし、どこまでも暗い空間の奥底で“椅子”に座る声の主は、紫色の双眼を瞬かせていた。

『よく考えてもみたまえ。』

彼は【兵藤一誠】の「友人」で、なおかつ隣のクラスの生徒だ。

兵藤一誠と関わりのある人間が「同じクラスにしかない」と考えるのも、少々仕方のない抹殺対象だという点はあるだろうが、そもそも兵藤一誠に告白し彼女になったという【天野夕麻】の話など相手が相手だ、本来は他のクラスや学年にまで噂が——【天野夕麻】の存在が——広がってもおかしくはない。

その可能性を考えれば、彼女が記憶処理を施すべき対象とは、少なくとも高等部二年のうちのひとクラスという程度では収まらないはずなのだよ』

「まあ、むしろなんでそーならねえのよ? やつとかねえのよ?」

……っつー話だよなあ、アレは」

ちやりん、ちやりん、と声の主は手元の賞牌を弄ぶ。

「ちよいと展開に無理がある」

『もちろん、そのすべてに記憶処理を実行すれば。』

シトリー家関係者の生徒会メンバーと顔を合わせてしまう危険性も生じる。

そのような内情を知らないにせよ、いち学年全体を記憶処理して回るのは無理がある。

仮に行うのであれば、彼女が実際に行うべき記憶処理は「兵藤一誠と同じクラスの生徒」と、複数のクラスを渡り歩く特異な学生に絞っておくのがベストであるはずだ。

しかし、月隠朔郎は一連の事態を憶えていた……それは、なぜか?』

『なぜならば、至高の墮天使レイナーレは。』

「兵藤一誠が学園内ではどう扱われる人物なのか?」「兵藤一誠の関係者が他のクラスにいるのか?」「複数のクラスを渡り歩く変人に、兵藤一誠の友人はいたのか?」を細かく調査していなかったからだ。

もとより兵藤一誠は何の部活にも所属していないからな、彼本人についてだけを書類上であれ表面上であれ調べたのであれば、それ以上の調査の必要はないと、そう解釈してしまうのも無理はない。

あのような馬鹿のたぐいの立ち回りなんぞ、実際に学園生活をしたことのある“人間”でもない限りは把握し切ることなど不可能だ。人間ではないレイナーレだからこそその盲点というわけだ……. なかなかに興味深い』

「はっ、なにかと思えば、なんだよそれ?」

しよーもねー理由で助かってんなあ、おい?」

『そもそも、彼女が駒王学園とは別の学校の女子生徒を騙るほかないほど、あの学園には悪魔や悪魔関係者が多く在籍している。墮天使が紛れ込むには厳しい環境だ。』

おそらくは彼女の慎重な調査姿勢が、結果として知るべき存在を把握しきれていなかったという事態に発展したのだよ。月隠朔郎の存在まで調査し切るには、いささか無理のある場所にレイナーレの抹殺対象は通っていた。

と、考えれば、今回のケースの真相もわかるだろう?』

『今回のケースの真相だ。』

月隠朔郎、アナザーフォーゼ。

彼は、「記憶処理を受けて原作進行度を忘れ、退場するはずだった」のだが。

「……駒王学園という魔境のおかげで、彼はその未来を免れたのだよ』

「良くも悪くも、レイナーレの無能さに救われたってことか?」

『さて、なあ?』

少なくとも調査の手際までは最善手ではあったが、最高手ではない』

『しかし……まったく、これだけは面白い。』

片や貴様のような契約者が【歴史原作】の破壊を目論見、片や朔郎のような契約者が【歴史原作】そのものに守られるとは!

転生の神というものには、飽きが来ない!!!』

「神なんだか、道化なんだかな」

紫色の瞳を細めると、“椅子”の背もたれに深く寄りかかる。

声の主の視線は天井の宗教画に向けられていく。数多の天使や信仰者に見上げられ、讃えられ、仰がれる後光を放つ男の姿絵に。日本でそのような絵を描くことのできる場所など、相当な西洋かぶれの好事家か、相応の信仰心を抱くものの手によってでしか用意できない。

そう、場所という額縁にふさわしい絵。

この巨大な宗教画は、建築物や土地という額縁によってでしか飾ることはできない。

そこに、蝙蝠の羽根やカラスの羽根が描かれることなどない。トカゲの尾などなく、蛇を思わせる生き物など映りはしない。どこまでも額縁の中には、光の中に約束された虹色の世界だけが広がっている。声の主は満足げに宗教画を見上げると、手元の賞牌を男の顔にかざす。

彼がかざす賞牌は丸く、姿絵の後光を覆い隠す。男の首は恐竜の首に変わり、一瞬にして数多の天使や信仰者たちの表情を別の姿へと作

り変えた。

膝を折り祝福を乞い求める祈りは、恐怖をもつて命を惜しむように。

天上の男を讃える天使は、這い上がった爬虫類に屈しているかのよう

に。
これでこそだ、これでこそ、そうあるべき姿なのだ。

声の主の唇は動き、首を縦に振る。

「まあいい、兵藤一誠を直接殺す機会は残っている。

今日でも明日でも問題はないが、原作ではわざわざ無能姫が自転車の後ろに乗るなんて真似をやってるんだ、タイミングが悪ければ【滅びの魔力】と戦うこともありうるな。

しかも肝心の問題はチラシ配りをするルートだな………帰り道を狙おうにも、やつの帰り道にはひと目の付く場所が多すぎる、やっぱりここは………!」

頬が裂けるかのような、どこまでも深い笑みを顔に刻む声の主を“神様”は呆れるように肩をすくめる。

彼がどの賞牌を天井画の誰に被せていたのかは分からないが、そんなものは【ハイスクールD×Dの世界】において、もはやするまでもない現実でしかないのだから。

現実であるということは、彼にとっての【ハイスクールD×Dの世界】がどのようなものかはともかく、【ハイスクールD×Dの世界】にとっての【彼の世界】で連想した「あるもの」こそが虚構なのだ。

【ハイスクールD×Dの世界】にありもしないものを、【彼の世界】にありもしないものと比較することこそ、真に価値がない。だからこそ、“神様”は嘆息する。

『………ところで、その悪趣味なマネキン人形、どうにかならんのかね?』

「マネキン人形? 馬鹿言うなよ。

最高の“椅子”じゃねえか、なあ、カーラワーナ、ミッテルト?」
カラスの羽根。

それと似た翼を持つ、二人の墮天使は。

少年の背を支え、尻を乗せる、“椅子”になっていた。

ゴシツクロリイタを身にまとう少女は、少年の馬となり。

ボディコンスーツを身にまとう美女は、少年の背もたれとなり。

それぞれが少年の言葉に賛同するような言葉とともに、小さなうめき声を思わせる音を喉奥から鳴らし続けている。少年は満足げに二人の頬をなでると、二人もまた満悦に酔いしれているかのような表情で微笑む。

さきほどから、声の主はずっとこの調子だ。

「最高だな、兵藤一誠のオーラと大差はねえけどよ。

別のチカラだったら、こうはできねーからな……！」

『………フン、調子がいいようだなによりだよ、貴様は。

そろそろ他の契約者の様子を伺わせてもらうぞ、私とて暇ではないのでな』

残りのアナザーウォッチを確認するように、“神様”は手持ちのアナザーウォッチすべてを使ってジャグリングをする。20000、20001、20002、20004、20005……ひとつずつ、アナザーウォッチに刻印された数字を確認すると、安心したのかアナザーウォッチを煙に変える。

『新条大夜、——【仮面ライダー〇〇〇〇^{オーズ}】。

どうやらお前は、私を楽しませるには十分な欲望^{性欲}があるらしいな』
自らも煙に変え、ステンドグラスの輝きから逃れていく。

日本の地方都市には珍しい“教会”の壇上に座る声の主、新条大夜、あるいはアナザーオーズと呼ばれるべき少年を、黒い翼の女たちの嬌声だけが讃えていた。

読者の皆様への投稿終了のお知らせ、および設定集

転生者：月隠朔郎

名前の由来は、晦、朔月。それぞれ月齢で『新月のひとつ前』と『新月』を指す。

すなわち、如月弦太朗（三日月）や我望光明（満月）と異なる人物像を意味する。

また、名前自体が新月、『日食』の原因となる月の状態を指すため、仮面ライダーウィザードと関係のある現象の名前、「仮面ライダーフォーゼ」の歴史を奪う者だからこそ次の仮面ライダーの歴史と関連のある名前であることを指す。

怪人名：【アナザーフォーゼ】

仮面ライダーフォーゼの力を持つライダー怪人。

アナザーライダーの適合率が高くなりやすい「誰にでも変身できる仮面ライダー」の力のひとつであり、ベルトのスイッチを押すことで半透明のモジュールを生成、本物のフォーゼのように戦うことができる。

ベルトの力だけを生身で使う場合、基本的には『レーダー』『カメラ』『パラシュート』『シールド』『メディカル』などの左腕(□)に生じるモジュール、『ビート』『スモーク』『ステルス』『ペン』などの右足(×)に生じるモジュールのみ。

性格面：ネガティブな感じの如月弦太朗。

「誰とでも友達であろう」と望む、かつ自分から友達になる性分。そうあるとする理由は、「ひとりぼっちなのが悪いのではなく、誰にも頼れないで強がるのは、頼れるやつに頼らないで頑張ってみるヤツのより、“甘えたり頼るだけの勇氣”もないってことだから『放っておけない』』という節介焼きと、同類としての同情と親愛。

そして、現実はそのような簡単にはいかないからこそ、その綺麗事を本当にするために頑張っている「やせ我慢（頼れないから頑張るのではない、頼らないで頑張ること）」。

転生先で本当に寂しいからこそ、この世界での絆を得ようとしている。

そのため、『誰にでも優しいが誰の味方もする』ことから、あんまり「誰かにとつての特別な誰かになろう」という欲求がなく、結果として「みんなにとつての特別な誰か」になれている。

夢は、友達を作り続けること（今も叶え続けること）。

将来の夢は………実のところ、まだ決まっていない。

正体がバレるきっかけは友達相手にやる「拳を突き出す」動きや、一瞬だけ友情のシルシをやりかけてしまう失敗、両手でガッツポーズをしかける&しゃがみかける、といった【仮面ライダーフォーゼ】の癖と元々の癖が似通っていること、友情のシルシに関しては仮面ライダーとして戦うとき以外はするつもりがないのにやってしまうことなど、元から可能なかぎり【アナザーフォーゼ】だとバレないために頑張ったつもりの言動が原因。

トドメは、イツセーを守るためだけに使ったロケットモジュールによる迎撃。

（隠れた場所からリーダー&ランチャーのコンボで遠隔攻撃するにはイツセーと敵の位置が近すぎた、あるいは隠れる場所自体がなかった）

悪魔に転生するか、否かに関しては「この力は借り物で、長くても8年保つかどうか」ということを言及し、せめて卒業するまでは友達を守るのに使おうとしていることを伝え、『悪魔には転生しない、できない、してやれない』と言い切る。

備考：リアスに関して

………ただし、そう言ったことを槍玉に挙げて、「じゃあ婚約の件で部長も助けてくれ」と言われると、流石に「親御さんに文句言うとか、駄目だったなら駄目だったなりにゲームの練習するとか、ちゃんと真面目に嫌がらなかつた先輩が悪い」と返し、「なんだかんだで婚約相手を認めているか、さっきの婚約者の理屈に納得してるから、嫌がることに思いきれなかつたんじゃないか」と投げかける。

どこにでもいる夢見る女の子なのではなくて、「そうやってみたかっただけ」の、現実をちゃんと見ていた、なにかを諦めた“先輩”なんじゃないかとも解釈する。

“転生の神”の真相：【新たな仮面ライダーの創造】

アナザー“フォーゼ”ウオッチを与えられた本当の理由は、仮面ライダーがいらない世界で聖書の『システム』が仮面ライダーを作り出したタイミングを見計らい、システムの産物である新たな仮面ライダーの歴史を奪うことで【ハイスクールD×Dの世界】そのものを破壊しようとしていた。

一度アナザーウオッチができてしまえば、仮面ライダージオウ本編においてもタイムジャッカーがあらかじめアナザーウオッチを（その時代の仮面ライダーからまだチカラを奪ってもいないのに）所持していられたように、他の世界線でもD×D産のアナザーライダーを出現させて強引にD×Dの歴史を一時的ながら消させることができてしまう。

ましてや【特典】として量産できれば、その数だけ【ハイスクールD×D】の世界を滅ぼせるということになる。

成功すれば、その世界でのアナザーライダーの力を利用して確実に異世界で生まれたオーマジオウ（またはジオウ転生者）を倒すことができる、または（うまく行けば）ハイスクールD×Dの世界からあらゆる神々と異種族の力を奪い取れる & ハイスクールD×Dの物語を消し飛ばせるアナザーウオッチが完成する。

アナザーライダーでしかないアナザーフォーゼたちは【ハイスクールD×Dの世界】での本物の仮面ライダーが生まれるための生贄である。複数体のアナザーライダーを作り出したのは、大量の転生者の中から仮面ライダーの素質があるもの、適合者を可能なかぎり見つけ出すことで、できるだけ多くの仮面ライダーを生み出し、システムが模倣し切るまで生き残らせるため。

しかし、もともとは素質がないものであってもアナザーライダーに

変えさせており、初期のその計画性のなさが未来において「システムが模倣し切るまえに三大勢力が減びてシステムが機能不全に陥る」という結末を招き寄せている。

つまり、「アナザータイム2008」は転生の神にとって【二週目】にあたる。

二週目で選ばれた新しいアナザーライダーこそが月隠朔郎以降のアナザーライダー。

一周目のアナザーライダーは「転生の神個人による計画」であったがために、過去の自分との衝突が目に見えてしまうため回収できず、意図的に一周目で使わなかったアナザーライダーを選出して解決させる算段だった。

唯一の計画外は、「アナザーフォーゼの変身者を選んでしまった主人公が、あんまりにもフォーゼの適合率を高く保てる存在だった」
「他の転生者と仲良くなれてしまった」という予想外すぎる状況。

人間の業からして、世界を奪い合うようなライダーバトルが始まるはずだったのに、予想に反して殺し合いが続かなかった、仲良くなれてしまったという奇跡。

ただでさえ倒しにくいアナザーライダーたちを相手にアナザーウオッチを回収し直すため、わざわざ直接出向かなくてはならなくなり、「アナザージオウ」の力の応用で神器所持者や異種族の力を取り込んで対処しようとする。